

在宅胃瘻症例の経口摂取についての調査

川瀬将紀¹⁾ 内田晶子²⁾ 河崎理子²⁾ 坂下真千³⁾ 中原さおり⁴⁾

菰野厚生病院 1) 薬剤部 2) 訪問看護ステーション 3) リハビリ 4) 栄養科

【背景】PEG が登場して以来、胃瘻は低リスクかつ安定して栄養供給を行うツールとして普及してきた。一方で胃瘻造設後の生活の質が問題視されている。以前我々は当院で胃瘻造設された症例について調査し、胃瘻造設から退院までに経口訓練または経口摂取が行われた例は限られたものであった事を報告した。(第 17 回三重 NST 研究会)

今回は訪問看護ステーションの協力を得て、在宅胃瘻症例の経口訓練または経口摂取について調査した。

【対象】平成 26 年 4 月から平成 27 年 3 月の当院訪問看護症例

【結果】全訪問看護症例 108 例中 胃瘻症例は 10 名であった。

そのうち経口摂取または経口訓練例は経口摂取と栄養材の併用例が 1 名、経口摂取を試みたが断念せざるを得なかった例が 1 名、計 2 名であった。

症例①70 歳台男性、ADL 全介助であり誤嚥性肺炎を繰り返し当院にて胃瘻造設された。退院時にはゼリー等 1 品ならば経口摂取可能であり、退院後も家人の介助にて胃瘻からの栄養材との併用が行われた。

症例②60 歳台男性、脳血管障害を繰り返し嚥下機能が低下、当院にて胃瘻造設された。

その後在宅にてペースト食を併用するも肺炎を繰り返し、絶食となっていた。再度嚥下造影を行い評価するも唾液誤嚥レベルであり直接訓練は勧められないと判定、絶食継続となった。